

MLF 2017 プログラム

日時 2017 年 9 月 9 日(土) 13:30～17:45、9 月 10 日(日) 10:00～16:00

会場 甲南大学 岡本キャンパス 5号館 2F 5-23 セミナー室

阪急神戸線「岡本」駅徒歩 12 分、JR 神戸線「摂津本山」駅徒歩 15 分

アクセスマップ：<http://www.konan-u.ac.jp/hp/mlf/konan5.html>

9 月 9 日 (土) 受付 13:30

- 13:45-14:35 発表 1 工藤 和也 (龍谷大学)
「分裂自動詞性再考：非対格性の仮説を超えて」
- 14:45-15:35 発表 2 小川 芳樹 (東北大学)
「名詞化接辞『家／屋』の形態統語的拡張用法と『句の包摂』
について」
- 15:35-15:55 休憩
- 15:55-16:45 発表 3 李慧 (東京大学総合文化研究科 研究生)
「『V1 + V2』型複合名詞の意味形成について
—語彙的複合語との対照を通して—」
- 16:55-17:45 発表 4 前田 宏太郎 (横浜国立大学 院生)
「内在的コントロールとクオリア構造とのかかわり
—切る・切れるの自他交替を通して—」
- 18:00-20:00 懇親会 (2号館 1階 Global Zone Porte / 詳細は下記)

9 月 10 日 (日)

- 10:00-11:00 招待発表 今西 祐介 (関西学院大学)
“Predicting (im)possible languages: Nominalization
and clause-type in Mayan and beyond”
- 11:10-12:00 発表 5 萩澤 大輝 (神戸市外国語大学 院生)
「under-V-ed の内部構造について」
- 12:00-13:30 昼食
- 13:30-14:20 発表 6 中谷 健太郎 (甲南大学)
“Aspectual interpretation of *-te kuru* as a result of modal slide”
- 14:30-16:00 招待講演 田窪 行則 (京都大学名誉教授)
「認知と形式の接点：トコロデ構文の統語論、意味論、語用論から」

懇親会

懇親会は2号館1階のイベントスペース **Global Zone Porte** で行います。会費は一般 5,000 円、学生 2,000 円程度の予定です。おおよその人数把握のため、参加をご希望の方は、以下の Google フォームまで参加表明いただくと助かります（できれば9月2日土まで）。

懇親会参加フォーム：<https://goo.gl/gZutxT>

（<http://>ではなく <https://>ですのでご注意ください）

日曜日の昼食

10日（日）はキャンパス内の食堂・コンビニは開いていません。大学より徒歩400mのところに「うまみや」（弁当屋）、インド料理屋、焼肉屋があるほかは食事できるところがありませんので、上記オプション以外の場合は昼食をご持参ください。

工藤 和也 (龍谷大学)

分裂自動詞性再考：非対格性の仮説を超えて

キーワード：非対格性の仮説、語彙アスペクト、LCS、連結規則、事象の選択
問題の所在：対格言語の自動詞が統語的に非能格と非対格に分かれるという非対格性の仮説 (Perlmutter 1978 ほか) を巡っては、これを主語の意図性や動詞の語彙アスペクトに還元する試みがあったが、いずれも例外が多く、失敗に終わっている。本発表では、影山 (2008) の下位事象分析に基づき、各動詞の語彙概念構造 (LCS) を検討することによって、英語の自動詞が非能格と非対格の区別を超えた多様なクラスに分かれることを明らかにする。また、動詞の意味と統語構造との対応関係について、従来の連結規則に生成語彙論の観点を取り入れた新たな分析方法を提案し、先行研究における非対格性のミスマッチを解消する。
議論の流れ：自動詞の非対格性については、主語の意図性や語彙アスペクトなどの意味的な分類が難しいことに加え、同じ非能格や非対格と呼ばれる動詞でも使役他動詞用法の有無が異なるという統語的な問題も残っている。

- (1) a. [非能格] The dog *walked*. → The gentleman *walked* the dog.
b. [非能格] The boy *laugh*. → *The clown *laughed* the boy.
(2) a. [非対格] The glass *broke*. → The girl *broke* the glass.
b. [非対格] The train *arrived*. → *The motorman *arrived* the train.

従来の語彙アスペクトに基づく LCS の鑄型 (影山 1996) を修正し、結果事象に漸進的な変化の過程 (MOVE) を設けた影山 (2008) に従うと、(1)と(2)に挙げた動詞の LCS は次のように表示できる (下線部は主辞的な事象を表す)。

- (3) a. walk: [[x ACT] CAUSE [x MOVE]] b. arrive: [y BECOME [y BE AT-z]]
c. laugh: [x ACT] d. break: [[x ACT] CAUSE [y BECOME [y BE BROKEN]]]

(3)により、walk と break はともに使役事象を成しているが、結果事象の違いから語彙アスペクトが異なること、laugh や arrive は (結果構文などの特別な意味の合成がない限り) 自動詞としてしか用いられないことなどが示される。

一方、近年の極小主義統語論では、二重動詞句の v を起因事象 (ACT)、V を結果事象 (MOVE や BE) の表象と捉えることが可能であり、動詞の意味と動詞句の構造について、次のような対応関係が想定できる (cf. 藤田・松本 2005)。

- (4) a. [x ACT] ⇔ [_{VP} x [_{v'} v VP]]
b. [y MOVE (TO-z)]/[y BE AT-z] ⇔ [_{VP} y [_{v'} V z]]

ここで意味構造から統語構造への写像に生成語彙論で提案されている「事象の選択」（意味構造の中から統語構造に対応する下位事象を選択すること）が関与すると仮定すると、break は ACT と BE の両方を統語構造に写像すれば他動詞に、BE だけを写像すれば(非対格)自動詞になることが分かる（主辞的な事象は常に写像される）。また、(4)によって、walk は通常は(非能格)自動詞だが、「項のすり替え」（影山 2000）が起これると他動詞にもなりうるということが説明される。

さらに、本稿の提案を採用すれば、従来、非対格性のミスマッチを起こしていた *semelfactive* や *degree achievement* に対しても統一的な説明が可能となる。

(5) a. John {winked/blinked} (his eye(s)) at Mary {only once/for a while}.

b. wink/blink: [[x ACT] CAUSE [x's eye(s) BECOME [BE CLOSED]]]

(6) a. The soup cooled {for/in} ten minutes. (cf. John cooled the soup.)

b. cool: [[x ACT] CAUSE [[y MOVE] BECOME [y BE COOLED]]]

(5)の *wink/blink* は主語の意図性が異なっているが、それが統語構造やアスペクト解釈に影響することはない。(6)の *cool* も文脈によってアスペクト解釈が変化するが、それによって動詞の概念的意味が異なるわけではない。*wink/blink* にしても *cool* にしても、アスペクトの違いは動詞の意味構造内で焦点化される事象の違いであり、それぞれの動詞の可能な項の具現化のパターンは上記(4)の連結規則と事象の選択という過程によってすべて説明可能である。

結論：統語的に自動詞として現れる英語の動詞には様々な意味構造を持つものが混在している。これらの振る舞いを説明するためには、動詞の LCS を検討し、意味構造と統語構造との対応関係を明らかにする必要がある。特に、動詞が複雑事象を形成している場合は、統語構造との対応付けに事象の選択が関与する。これは LCS が動詞句構造よりも拡大されたことによる必然的な結果であり、言語の意味と形式は対応しながらも完全に同形ではないことを示唆している。

参照文献：藤田耕司・松本マスミ(2005)『語彙範疇 (I)：動詞』研究社／影山太郎(1996)『動詞意味論』くろしお出版／影山太郎(2000)「自他交替の意味的メカニズム」丸田忠雄・須賀一好（編）『日英語の自他の交替』33-70. ひつじ書房／影山太郎(2008)「語彙概念構造(LCS)入門」『レキシコンフォーラム No. 4』239-264. ひつじ書房／Perlmutter, David M. (1978) Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *BLS* 4, 157-189.

小川 芳樹 (東北大学)

名詞化接辞「家／屋」の形態統語的拡張用法と「句の包摂」について

影山 (1993: 324-331)では、句を包摂する日本語の接辞の事例が多数紹介され、それらが2つのタイプに分けられると指摘されている。第一のタイプは、「元来は形態素ないし語を対象とする語彙的な接辞要素が、統語的な句にまで拡張する場合」で、「洋風」「フランス風」などの派生語を作る「～風」が、[[中世のフランス]風]、[[テレビのスペシャル番組]風]などの拡張用法を生むのはこのタイプである。第二のタイプは、「もともと句ないし節を対象とする句接辞(phrasal affix)」で、こちらは、全体として接続詞的なもの(「食べながら」の「ながら」等)と、名詞的なもの(「昨年会ったっきり」の「きり」等)に分けられる。

ところで、日本語には、名詞+「家／屋」からなる「野心家／自信家」「照れ屋／うぬぼれ屋」のような派生名詞がある。この接辞「家／屋」については、「作曲家」「酒屋」のように特定の職業や専門店を表す派生語を作る用法が基本にあったと思われるが、「X+家」についても上記のような人の属性を表す語への意味拡張が見られ、「X+屋」についても、「お天気屋」「気分屋」のような語への同様の拡張が見られる。これらの意味拡張は、メタファー、メトニミーなどによって動機付けられた構文化の側面をもっており、構文文法での先行研究はあるが(野田 (2013))、その形態統語的拡張についての分析は管見にして知らない。

本発表では、この「X+家／屋」の形態統語構造について検討し、第一に、それらが統語的にも語または語基と結びつく接辞から句を包摂する接辞へと拡張する変化の過程にあると主張する。第二に、「家／屋」が句を包摂する場合、それは名詞的述部としては機能するが、主語位置に立つことのできる通常の項名詞句としては機能しないという事実を指摘する。まず、(1)の事実を見られたい。

- (1) a. 彼は、かなりの野心家だ／自信家だ／努力家だ。
b. 彼は、かなりのうぬぼれ屋だ／照れ屋だ。

ここで、「かなりの野心家」には、[[かなりの野心]を持った人]のように「かなり」が「野心」のみを修飾する解釈が自然だが、その内部構造については、まず、程度副詞を含むまとまりが全体で[No [No かなりの野心]家]という語を構成する、と言うことはできない。この場合、*[[very fresh] fish shop]などの非文(島村 (2011))を排除するのと同じ「形態的緊密性の原則」によって、当該表現は排除

されるはずだからである。第二に、影山 (1993:335)は、「先祖の墓参り」のような表現は、意味的には[[先祖の墓]参り]という構成素関係をもつべきだが、「*古い墓参り」「*山奥にある墓参り」など、句の包摂が自由にできないことや、「墓」が分離不可能所有名詞で項構造をもつことなどから、[先祖の[墓参り]]という統語構造をもち、非主要部の「墓」から「墓参り」という複合名詞全体への項構造の受け継ぎの結果として「先祖」は「墓」から意味役割を受け取ることができると論じている。しかし、「かなりの野心家」の場合、「かなり」と「野心」は述部とその項の関係ではない上、「呆れるほどの野心家／底なしの自信家」のように「野心」の修飾語句のタイプに制限がないので、[NPかなりの [N₀ 野心 [N₀ 家]]]という構造をもとに、非主要部からの素性継承を通して「かなり」と「野心」の修飾関係を局所化する分析は妥当でない。以上の理由から、本発表では、「かなりの野心家」は、概略、[NP [XP かなりの野心 X] N (=家)]のような形態統語構造をもつ句の包摂の例であると主張する。その上で、このような句の包摂は「[かなりの巨大]生物／[かなりの大量]投与」のような複合名詞内にも観察されることや、「[なかなかの大]物／[東大に入れるほどの好]成績」など「かなり」以外の副詞類にも広く観察されることから、(1)の容認性は、副詞「かなり」の個癖や接辞「家／屋」の個癖には還元できない統語的特性であると論じる。

第二に、「かなりの野心家」のタイプの名詞句は、(1)のように述語位置には生起できるが、(2)のように通常の主語位置には立つことができない。ただし、(3)のような特定の構文では、主語位置に立てる場合がある。

(2) *かなりの野心家／*かなりの自信家が太郎を叱っていた。

(3) かなりの野心家／かなりの自信家が我が社にいたものだ。

本発表では、「かなりの～家／屋」という叙述名詞句が、束縛されるべき変項を含む不定名詞句の一種であると仮定した上で、(2)の非文法性に対して、「束縛変項が演算子のc統御により認可されないためである」とする説明を与える。

影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房，東京。

野田大志 (2013)「日本語における[X+屋]型派生名詞の構文的多義性」『人間情報学研究』第18巻, 39-57.

島村礼子 (2011)『語と句の名付け機能：日本語の「形容詞＋名詞」を中心に』開拓社，東京。

李慧（東京大学総合文化研究科 研究生）

「V1+V2」型複合名詞の意味形成について

—語彙的複合動詞との対照を通して—

キーワード：「V1+V2」型複合名詞、語彙的複合動詞、語形成、意味関係

1.問題提起

「動詞（V1）＋動詞（V2）」の形を取る複合名詞のうち、現代日本語において、対応する複合動詞形が用いられないタイプのものがある。例えば、「やり取り、見え隠れ、出し入れ、起き抜け、受け払い」などが挙げられる。

「V1+V2」型複合名詞について、「やり取り、見え隠れ、出し入れ」のような複合動詞形は用いられないが、「スル」をつけられる語を取り出し、動名詞の1種として扱うものが多く見られる。複合という視点から見れば、「V1+V2」複合名詞は形態上、「V1+V2」複合動詞と似ており、機能上でも重なる部分もある。本研究は、複合動詞になることができない「V1+V2」複合名詞に焦点を置き、語彙的複合動詞との対照を通して、語構成要素の意味的關係から、語彙的複合動詞の成立への示唆を掘り下げる。

2.考察

まず、語全体の意味から見れば、表1に示すように、前項（V1）と後項（V2）の構成要素には意味変化が起こるものが存在する。

表1 2つの複合語タイプにおける構成要素の意味変化

複合語 のタイプ		構成要素の変化		
		前項と後項は本動詞の意味を保持しないもの		
		一方の構成要素の 意味的分担が 不明確なもの	構成要素の一方が 接辞的なもの	前項と後項の一方が 名詞化したもの
「V1+V2」 複合名詞	A「動詞形なし、 スル形なし」類	○ ¹ 例： <u>生き写し</u> 、 <u>仕打ち</u> 、 <u>引き違い</u>	○ 例： <u>引き明け</u> 、 <u>焼き立て</u> 、 <u>止まり掛け</u>	○ 例： <u>痛み止め</u> 、 <u>滑り止め</u> 、 <u>考え違い</u>
	B「動詞形なし、 スル形あり」類	△ 例： <u>果し合い</u> 、 <u>逢い引き</u>	△ 例： <u>隠し立て</u> 、 <u>使い立て</u>	△ 例： <u>願い出</u> 、 <u>断り書き</u>
語彙的複合動詞		○ 例： <u>成り上がる</u> 、 <u>植えつける</u> 、 <u>仕入れる</u>	○ 例： <u>押し入る</u> 、 <u>取り壊す</u> 、 <u>差し入れる</u>	×

¹ 表1には、○は「あり」の意味、×は「なし」の意味、△は「あるが数が限られている」の意味を表す。

次に、語全体の意味に V1 と V2 の両方の意味が含まれる場合、「V1+V2」型複合名詞の前項要素（V1）と後項要素（V2）の関係は以下の通りである。

- A 前項が、後項の動きの主体の「状態」を表す 例) 添い寝、寝冷え、盗み撮り
- B 前項が、後項の動きの「様態」を表す 例) 走り書き、投売り、殴り書き
- C 前項が、後項の動きの「原因」を表す 例) 飢え死に、討ち死に、痛み分け
- D 前項が、後項の動きの「目的」を表す 例) 覚え書き、試し切り、食い置き
- E 前項が、後項に先行する「動き」を表す 例) 狙い撃ち、ひき逃げ、焼討ち
- F 前項が、後項の動きの客体の「動き」や「状態」を表す 例) 置き引き、照れ隠し
- G 前項が、後項と並列関係にあるもの 例) 見え隠れ、見聞き、乗り降り

一方、影山（1993）によると、語彙的複合動詞の意味の成り立ちには、次のような前項と後項の間の意味関係のパターンがある。

- a 手段：折り曲げる、叩き潰す、押し通す、切り取る
- b 様態：泣き暮らす、駆け寄る、乱れ飛ぶ、飲み明かす
- c 原因：焼け死ぬ、崩れ落ちる、寝静まる、歩き疲れる
- d 並列：飛び跳ねる、光り輝く、慣れ親しむ、泣き叫ぶ
- e 補文：見逃す、売り急ぐ、乗りこなす、言い交す

3.結論

①「V1+V2」型複合名詞において、「スル形あり」類は語彙的複合動詞と比べ、前項と後項の意味の透明度が高い、しかもそれぞれによって表現されない要素も存在する。

②「V1+V2」型複合名詞において、語彙的複合動詞と比べ、前項が後項の動き主体の「状態」や「目的」を表すような2種類が独自に存在する。

参考資料

- 石井正彦 1984 「複合動詞の成立—V+V タイプの複合名詞との比較—」『日本語学』(3) 11：81-94 日本東京：明治書院
- 伊藤たかね・杉岡洋子 2002 『語の仕組みと語形成』 日本東京：研究社
- 影山太郎 1993 『文法と語形成』 日本東京：ひつじ書房
- 鈴木智美 2014 「現代日本語における対応する動詞形のない V1+V2 型複合名詞—辞典に基づくリスト化」『日本語・日本学研究』4：95-109 東京外国語大学国際日本研究センター

前田 宏太郎 (横浜国立大学 院生)

内在的コントロールとクオリア構造との関わり

一切る・切れるの自他交替を通して—

キーワード：自他交替，内在的コントロール，目的役割，代入規則

本発表では，影山（1996）の分析に基づき，英語の *cut* と日本語の「切る・切れる」を例に，以下の2つの提案を行う：

1. 名詞の目的役割が自他交替に関わる要素の1つである。
2. 語彙概念構造（以下 LCS）の表示方法に新たに「代入規則」を設ける。

影山（1996）では，一般的に自他交替が可能な動詞を能格動詞と呼び，他動詞から外項と内項の同一化によって自動詞の用法が生じるとしている．この同一化は，対象となる名詞に内在的コントロールが認められた時に生じる．このため，*cut* のような他動詞用法しか持たない動詞は，「『動作主が対象物に対して刃物を当てることによって』という手段に重点」（p. 160）があり，対象の名詞の内在的コントロールは不問となる．しかし，日本語の「切る・切れる」は自他交替が可能である．これは接辞-*e*-の働きであり，対象の名詞の内在的コントロールが認められ，外項と内項の同一化が生じ自動詞用法が得られる．

(1) a. *cut* 例) Taro cut the cake. / *The cake cut.

x CAUSE [y BECOME [y BE AT *cut*]]

b. 切る 例) 太郎がケーキを切った. / 太郎がロープを切った.

x CONTROL [y BECOME [y BE AT 切られた]]

b'. 切れる 例) *ケーキが切れた. / ロープが切れた.

x = y CONTROL [y BECOME [y BE AT 切られた]]

対象となる名詞の内在的コントロールを一切考慮にいれないのが(1a)の CAUSE 関数で，考慮に入れて自他交替を可能にするのが(1b)と(1b')の CONTROL 関数である．この2つの関数が動詞の自他交替の振舞いの違いを示す．しかし，内在的コントロールについて，具体的に名詞のどのような性質を指すものであり，その情報はどこに記載されるべきかについては十分な検討が行われていない．

ここで Pustejovsky（1995）のクオリア構造の観点から「切る・切れる」の自他交替の例を眺めてみると，名詞の目的役割が LCS の結果事象において損なわれているかどうか自動詞用法の可否を決定していることがわかる．

(2) a. ロープ／紐／ネックレス／ストラップが切れた.

b. *ケーキ／*もやし／*セロテープ／*髪の毛／*爪が切れた.

(2)に挙げた例はいずれも他動詞用法では自然だが、自動詞になると(2b)は不自然になる。これらの名詞の目的役割は以下のようになる:

- (3) a. ロープ：縛る，紐：結ぶ，ネックレス：着飾る，ストラップ：飾る
b. ケーキ：食べる，もやし：食べる，セロテープ：貼る，髪の毛：伸びる，爪：伸びる

例えば、ネックレスは切れてしまえば、ネックレスを用いて着飾ることができなくなる。しかし、セロテープは切れてしまっても、貼ることはできる。このように、自動詞用法が可能な(3a)の名詞では「切る」という動詞によって、結果事象でその目的役割を果たすことができなくなる。影山（1996）は、名詞の状態変化が生じれば、意味的重点が置かれ、結果事象への際立ちが高くなり、自動詞用法が可能になる、と説明している。ここから一歩進めて、「切れる」という動詞の場合には単に「切れた」だけでは十分な状態変化は生じておらず、その名詞の目的役割が果たせなくなってしまう程の変化が状態変化として認められることで、自動詞用法が可能になる。つまり、自他交替に関わる要素として、内在的コントロールと名詞の目的役割との間に相応な関係が存在するようになる。

では、内在的コントロール、もしくは目的役割の情報は LCS とどのような関係において記述されるべきなのだろうか。LCS 内部の変項 (x や y) に実際の名詞が代入される時が考えられる。CONTROL 関数を持つ動詞の LCS の変項部分に具体的な名詞が代入されると、名詞の目的役割を CONTROL が読み込み、目的役割が損なわれているかを決定する。この一連の操作を「代入規則」として設定すれば、LCS が担うべき情報と名詞から得られる情報とを区別でき、かつ、動詞の持つ統語に関わる情報としての LCS を複雑化せずに示せる。

このように、影山（1996）で提案された「内在的コントロール」は名詞のクオリア構造の観点からその一部の説明が可能となる。加えて、名詞のクオリア構造を取り入れることで動詞の語彙概念構造はより明確なものとする。

参考文献

影山太郎. (1996). 『動詞意味論: 言語と認知の接点』 東京: くろしお出版.

Pustejovsky, J. (1995). *The Generative Lexicon*. Cambridge: MIT Press.

**Predicting (im)possible languages:
Nominalization and clause-type in Mayan and beyond
Yusuke Imanishi (Kwansei Gakuin University)**

In this talk, I propose a micro-parametric analysis of certain clause-types and nominalizations found in split ergativity of several Mayan languages. While Mayan languages display a prototypical ergative alignment through head-marking, most of them exhibit aspect-based split ergativity: the alignment in perfective aspect is ergative, whereas the one in non-perfective aspect (e.g., progressive aspect) is accusative (or non-ergative). This talk shows that a single parameter regarding nominalization involved in the accusative side of Mayan languages with aspect-based split ergativity allows us to predict what type of clause and alignment is (im)possible in their non-perfective sentences. I then extend the analysis of Mayan ergative splits to nominalizations found in non-perfective sentences of non-ergative languages such as Welsh and Dutch, thereby explaining why a particular clause-type strikingly similar to the one found in some Mayan languages appears in their non-perfective sentences.

Since Robertson (1980), Mateo Pedro (2009) and Imanishi (2014, to appear), it has been pointed out that the accusative side of Mayan languages shows variations regarding the alignment between grammatical relations and agreement morphemes. For example, in the accusative side of Kaqchikel, the intransitive subject and the transitive subject alike are cross-referenced by the *absolutive* morpheme (also known as the *set B marker* in Mayan linguistics). On the other hand, the object of a transitive verb is cross-referenced by the *ergative* morpheme (or the *set A marker*). In the accusative side of Chol and Q'anjob'al, by contrast, both the intransitive subject and the transitive subject are cross-referenced by the set A marker, while the set B marker cross-references the transitive object.

Building on recent studies on split ergativity of other languages such as Basque (Laka 2006) and Chol (Coon 2010, 2013), I claim that the accusative side of some Mayan languages such as the ones mentioned above forms a biclausal structure: an aspectual predicate embeds a nominalized clause. The contrastive alignments sketched above are then unexpected, given that all of these languages form a biclausal structure for their accusative side. I argue that the contrastive alignments found in Kaqchikel, Chol and Q'anjob'al follow from a single parametric difference regarding nominalization involved in the accusative side of these languages. I propose that an unaccusative requirement holds for nominalization in Kaqchikel, whereas the requirement does not apply to nominalized verbs in Chol and Q'anjob'al: the requirement that a nominalized verb have an unaccusative structure, and hence cannot have an external argument. I develop the unaccusative requirement, based on a similar observation made for nominalizations in Greek and some Indo-European languages (Alexiadou 2001). I then show that this parametric analysis of split ergativity can correctly predict what type of clause and alignment is (im)possible in non-perfective sentences of other Mayan languages. Extending the analysis of Mayan ergative splits to non-ergative languages such as Welsh and Dutch, this talk also analyzes nominalizations found in their non-perfective sentences such as progressive sentences and explains why these sentences display a clause-type similar to the one found in Mayan languages.

萩澤 大輝（神戸市外国語大学 院生）

under-V-ed の内部構造について

キーワード 構文形態論 スキーマ 再分析 逆成

本発表は、野中・堀内 (2016) が指摘した **under-V-ed** というスキーマを再考する。主張は次の 2 点である。(i) このスキーマの構造は [under-[V-ed]] が妥当である。(ii) 個別の語では **under-V** という形が生じており、これは再分析による。

1. 問題の所在

野中・堀内 (2016: 196) は OED を参照し、**undercooked** や **underequipped** という語は記載があるのに対して、**undercook** や **underequip** は未記載であることを指摘した。さらに Booij (2010) による構文形態論の考えに基づき、これらの語は確立した **under-V-ed** というスキーマに基づく派生だと主張した。

ここで問題となるのは、スキーマの内部構造である。Booij 自身は語レベルのスキーマにも括弧表示をしているが、野中・堀内は明示していない。ただし脚注において [under-[V-ed]] ではなく [[under-V]-ed] の構造を支持することを示唆している¹。

以下で見るように、どちらの構造にも支持するデータが存在する。この対立は再分析の途上にあるケースとして自然に説明がつく。

2. 対立するデータ

まず [under-[V-ed]] を強く支持するデータとして、語基によって著しく意味の変わる接辞との共起例がある。**un-**は形容詞につけば **negative** (e.g. **unfair**), 動詞につけば **reversative** (e.g. **unfold**) の意味になる。

- (1) a. [P]oor schools, lack of role models, *un(der)educated* parents... (COCA)
b. [T]here are so many *un and underdeveloped* areas... (NOW)

¹ なお野中・堀内の考えに反し、OED は **underequipped** などについて [under-[V-ed]] の構造を支持する記述をしている。

もしも [[under-V]-ed] の構造が正しければ、必然的に un-の語基も動詞となる。ところが「educate / develop したものを元に戻す」という読みは常識的に難しい。したがって un-も under-も共に分詞形容詞についていることになる。

一方で、野中らが OED に未記載だとしたタイプの語形も、コーパスではわずかながら生起例がある。これは [[under-V]-ed] の構造を支持する。

(2) [Y]ou need to *undercook* your pasta a little bit or else it'll be mushy. (COCA)

3. 再分析とその動機づけ

(2) のデータは、[[day][dreamer]] が [[daydream]-er] と再分析された結果、daydream という動詞が逆成されるようなケースと平行的に捉えることができる。こうした例が under-では散発的であることから、スキーマとしては [under-[V-ed]] を想定し、個別の語に限って under-V という形を認めればよい。また undercook が単位として定着した話者にとっては [[undercook]-ed] の構造もありうる。

この再分析が生じる動機づけは何だろうか。まず under-は、un-などとは違って語基の品詞が何であれ意味に大きな差がない (cf. under-ripe_A, under-estimate_V)。これが内部構造の分析に揺れが生じる一因である。さらに Pollatsek et al. (2010) は構造的曖昧性のある unlockable のような語は、[un-[lockable]] ではなく [[unlock]-able] と解釈されやすい傾向を実験で示した。under-V-ed の再分析もこの方向に沿うものである。

参考文献

野中大輔, 堀内ふみ野 (2016) 「underestimate とは言っても underheat と言わないのはなぜか—動詞接頭辞 over と under の対比から—」日本言語学会第 125 回大会予稿集, 192-197.

Booij, Geert (2010) *Construction Morphology*. Oxford: Oxford University Press.

Pollatsek, Alexander, Denis Drieghe, Linnaea Stockall, Roberto de Almeida. (2010) The Interpretation of Ambiguous Trimorphemic Words in Sentence Context. In: *Psychonomic Bulletin & Review* 17, 88-94.

Aspectual interpretation of *-te kuru* as a result of modal slide

Highly polysemous nature of the constructions in the form of *V-te kuru* ‘V-TE come’ in Japanese has been studied extensively in the literature (Arita, 2001; Imani, 1990; Morita 1968, 1977; Nakazawa, 2002; Nakatani, 2008; Sawada, 2008; Teramura, 1984; etc.). The so-called “aspectual” use of *-te kuru* is particularly an interesting case:

- (1) *tyokin ga naku nat-te ki-ta* ‘savings NOM nonexistent become-TE come-PAST’

What is peculiar about this example is that it is both inchoative and imperfective: the sentence in (1) is interpreted as the savings having started to decrease considerably, but not been completely gone yet. Thus it contrasts with the simple past tense counterpart of the sentence without *-te kuru*, *tyokin ga naku nat-ta*, where the savings are regarded as completely gone. This “imperfective” interpretation of aspectual *-te kuru* also contrasts with non-aspectual *-te kuru*. For example:

- (2) *syukudai o yat-te ki-ta* ‘homework ACC do-TE come-PAST’

In (2), the homework is completed before the movement. Then the question is how and when the “imperfective” reading of *V1-te kuru* emerges.

A key to the solution lies, I argue, in the “proximity” reading of *kuru* as the main verb, illustrated below:

- (3) *a! takusii ga ki-ta!* ‘taxi NOM come-PAST’

This sentence can be truthfully uttered even when the taxi is in a distance, as long as (i) the taxi is within the speaker’s sight, *and* (ii) it is approaching the speaker. Note that the sentence cannot be used if the taxi recognized by the speaker is not expected to move toward the speaker—e.g., if it is crossing the intersection orthogonally to the street where the speaker is located. In other words, the “reaching-the-speaker’s-location” component of the semantics of *kuru* is not completely absent in (3), but is made to “slide” from the extensional domain into the modal domain. In the Generative Lexicon framework, this can be captured as a transfer from FORMAL to TELIC.

I hypothesize that when a transition predicate such as *naku naru* ‘to be gone’ is concatenated with *-te kuru*, simple qualia collapsing does not work because the output would not make sense (‘#The savings are gone and came here.’). Thus the modal version of *kuru* is utilized. Furthermore, the theme of *kuru*, i.e., the theme of moving

and reaching, is reinterpreted as events (Ikegami 1981; Masuoka 1992; Teramura 1984; Nakatani, 2008; Sawada, 2008). Note that a transition event (e^T) always presupposes a negation of the result state ($\pi(e_1^T)$ presupposes $\neg\pi(e_0^S) \ \& \ e_0^S < e_1^T$), and I assume that a presupposition, by definition, is constantly placed in AGENTIVE. The transition event itself is slid into the modal domain (i.e., TELIC) along with the FORMAL of *kuru*.

$$(4) \left[\begin{array}{l} \mathbf{naku\ naru} \\ \underline{\text{FORMAL} = \neg\text{exist}(e_1^T, x)} \\ \text{AGENT} = \text{exist}(e_0^S, x) \end{array} \right] \longrightarrow \left[\begin{array}{l} \mathbf{naku\ nat-te\ kuru} \\ \underline{\text{TELIC} = \neg\text{exist}(e_2^T, x) \ \& \ \text{at}(e_2^T, \text{SL})} \\ \text{FORMAL} = \text{move}(e_1^P, e_0^S) \\ \text{AGENT} = \text{exist}(e_0^S, x) \end{array} \right]$$

This reads: there is a presupposed state e_0^S that x (e.g., the savings) exists, and this state moves (e_1^P , where P stands for process) in the direction that x is likely to be gone under normal circumstances, and this transition event is expected to fall on the speaker. This analysis captures the imperfective reading of aspectual *-te kuru*. It also explains why aspectual *-te kuru* is more compatible with transition (achievement) predicates than process (activity) predicates (e.g., (5)): when there is no transition expected to be achieved, there is no point in applying a modal slide.

(5) *otikon-de i-ta ootoo ga { egao ni nat-te / #warat-te } ki-ta.*

depressed be-PAST brother NOM { smile DAT become-TE / #laugh-TE } come-PAST

In this respect, the present proposal has an advantage over similar ones by Arita (2001) and Sawada (2008), which do not explicitly employ aspectual perspectives.

In addition, the abstract movement of the presupposed state, $\text{move}(e_1^P, e_0^S)$, which imposes a “gradual change” reading, accounts for the fact that only the predicates with a gradable scale can enter this frame. This can be tested with adverbial *sukosi*:

(6) a. *tyokin ga sukosi naku nat-ta => naku nat-te ki-ta*

b. *kao ga sukosi aozame-ta => aozame-te ki-ta*

c. *#densya ga sukosi tootyakusi-ta => #tootyakusi-te ki-ta*

Selected references: Arita, S (2001) “Nihongo no idoo koobun ‘V-tekuru’ ni tuite no oboegaki,” *Osaka-Shoin Daigaku Ronshu* 38. / Sawada, J (2008) “‘Henka gata’ asupekuto no ‘tekuru’ ‘teiku’ to jikansei,” *Studies in the Japanese Language* 4. / Imani, I (1990) “V-tekuru to V teiku ni tuite,” *Nihongogaku* 5. / Nakatani, K (2008) “Tekuru, Teiku no Doosi Kyooki Seegen no Hasei,” *Lexicon Forum*, No. 4.

認知と形式の接点：トコロデ構文の統語論、意味論、語用論から

田窪行則

京都大学名誉教授

トコロデという形式は「木村が来たところで情勢に変化はない。」のような譲歩の用法と「木村が入場したところで音楽が始まる。」のように契機の用法を持つ。この二つは、疑問詞を含んだ場合、そのスコープが異なる。譲歩の場合は、「誰が来たところで、情勢に変化はない（の）。」のように疑問詞はトコロデの取る節内にスコープがとどまり、全体は肯定文となるが、契機のトコロデは「誰が入場したところで音楽が始まる（の）？」のようにトコロデが取る節内に疑問詞のスコープがとどまらず、全体は疑問詞疑問文となる。本発表では、この現象のメカニズムを統語論、意味論、語用論とそのインターフェイスという観点から考察する。